

れておりますが、思い出として書きました。

満州・シベリヤ・北鮮の思い出

滋賀県 黄地 誠 二

大阪の日立造船に勤務していた私は、現役兵として昭和十九年三月二十一日満州第八百九十三部隊入隊、門司集合の通知を受取ました。どこへ行くのかわからず不安でした。博多港より乗船、釜山上陸、汽車に乗り、初めて行先が佳木斯であることがわかりました。

二人兄弟の兄も同じ工兵で伏見工兵隊入隊、何回となく面会に行ったことを思うと大きな違いでした。佳木斯より歩いて五里、やっと部隊に着いた時、大隊長のいわれたことが

「夜は絶対外に出ないこと、狼が何時出るかわからないから」

とのこと。初年兵の始まりでした。

ソ満国境の林口の中隊本部にいた私は、昭和二十年八月八日は忘れることが出来ません。丁度その日は外出することになっていました。早朝大隊長より電話にて外出中止、直ちに戦闘準備に入るよう命令があり、一瞬耳を疑いました。不可侵条約も締結しておりソ連が参戦するとは思ってもよらぬことでした。直ちに重要書類を焼却、戦闘態勢に入りました。その時すでに戦車の音が遠くに聞こえ、ことの重大さを感じました。

中隊長より「命を預けてくれ」といわれ、爆薬を持ち戦車に突入玉砕攻撃の覚悟、いよいよこれで最期かと思いました。然しすでに戦車は前方に行き去り、危うく一命をとりとめることが出来ました。

五中隊では全滅の知らせも入り、私達六中隊はバラバラになって行動することになり、八月十五日の終戦を知ったのは八月三十日になってからでした。

その間はもちろん食べるものとてなく、草や木や食べられるものは手あたり次第食べました。水を飲んでいて気がつくところには馬が死んでいたこともありました。

東京城において武装解除、貨車に乗せられ「ダモイ東京」に騙され、収容所ピラカンに送られました。

その時、隊長がいわれた言葉の中に「おちぶれて袖に涙のかかるとき、人の心の奥ぞ知られる」という歌の文句でした。捕虜となつて最低の生活をする事になりいかに心を強く持ち生き抜くことが大事であるか目標を教わつたと思います。こうして無事帰ることの出来たのもこの歌のお陰だと思つております。

零下三十度の寒さの中、粟や高粱の馴れない食事、苛酷な労働、栄養失調や急性肺炎のため次々と死んで行き死体の山でした。

「働かざる者は食うべからず」作業に行かない者は食べるものも与えられません。私は体調の悪い時は作業を休み絶食に耐えました。それが体を守る手段だと考え、結果としては良かったと思ひました。

死体の埋葬に引率していったことがありましたが死体の着衣は、はがされまる裸でした。木の枝をかぶせて葬ることが、出来るすべてでした。何時自分がこういう運命になるかと思うとやりきれない気持ちで一杯

でした。

黒パンの分配では大きい小さいで争い、ここまでの人間として醜くなるものかと淋しい限りでした。何時とはなく歌われてきた、

「今日も暮れゆく異国の丘に、

友よ辛から切なかる、

我慢だ待つてろ・・・」

あの異国の丘の歌で、どれだけ心が癒され励まされたかわかりません。収容所を二回変わり、最後の女医さんの診断で北鮮の南浦に移されました。そこでは舟積みが仕事でした。馴れないため海に身を投げる者もいました。

一番気になつたのは夜、汽笛の音で、ポーポーとなんともいえない郷愁にかりたてられました。海に向かうに日本が！気が狂つて妻や子のことをわめき叫ぶ者、夜盲症のため夜外の便所に行けない者。世話は懸命にしましたが一緒に内地に帰ることが出来なかつたのが何よりも残念でした。

佐世保に上陸やっと念願の内地の土をふむことが出

来ました。昭和二十二年一月十五日でした。何の土産もないが「シラミ」がいるかもわからん、といった時の母の驚いた顔忘れられません。

幸いにも家は商売が忙しく家の手伝いをする事になり、二人の子供、四人の孫に恵まれ幸せな生活を送らせて戴いています。

孫達の前で兵隊やシベリヤの話を聞かせていた時、孫が「おじいちゃんが苦勞して無事に帰って来てくれたお陰で、私達がこうして元氣にいるのやなあ」といったことがあります。全くその通りで運命の不思議、生かされている有り難さ、感謝せずにいられません。二度と戦争がなくいつまでも平和で幸せであることを念じ、不幸にも亡くなられた戦友のご冥福を心よりお祈り致します。

北鮮經由復員記

佐賀県 田中菊治

昭和二十年八月十日、下城子官舎の家族を無事に牡丹江の家族収容部隊に引き継ぎ、図們の本隊に合流した。

本隊は図們後方の山地に陣地を構築してソ連軍の侵入に備えていた。私は本部付となり連絡兵を命じられ、各所に散在して陣地を備えている各中隊への連絡に当たっていた。

極度に緊迫した状況の中でも直ちに戦火を交えることもなく数日が過ぎ、八月十六日になったころ、本部の將校、下士官の間になんとなく動揺が感じられた。兵の我々にはわからないが緊迫した気配がヒシヒシと身に迫ってくるものがあった。

翌日になり図們駅集合の命令が出、被服も一装用を支給され、真夏というのに冬衣も携行せよとの指示で